

稲作・畑作

営

農

情

報

白神ねぎ



○長ねぎ栽培について
病害虫の発生が更なる多くなる時期ですので、圃場を確認しながら適期防除に努めましょう。

- 【病害】
降雨の状況や気温の推移に注意しながら圃場を確認すること!!
- ・軟腐病 オリゼメート粒剤、ヨネボン水和剤、スターナ水和剤、Zボルドー など
 - ・白絹病 モンカット粒剤、モンガリット粒剤、モンカットフロアブル40 など
 - ・べと病 リドミルゴールドMZ、レーバスフロアブル、フォリオゴールド など

- ・さび病 ラリー乳剤、オンリーワンフロアブル、アミスター20フロアブル など
- ・黄色斑紋病斑（マダラ模様）対策のため、葉枯病（黒斑病）の防除をしましょう。
ロブラール水和剤、ポリペリン水和剤、テーク水和剤など
- ※夏ねぎの収穫が始まっているので、収穫前日数に注意しましょう。

- 【害虫】
気温高め推移で害虫の発生が多発傾向に!!
- ・ネギアザミウマ ダントツ粒剤、ハチハチ乳剤、アグロスリン乳剤、ディアナSC など
 - ※多発した場合は、系統が異なる剤や遅・速効剤の組み合わせによる混合散布が効果的です。
 - ・ネギハモグリバエ リーフガード顆粒水和剤、ベストガード粒剤など

白神山うど



- 【摘芯について】
・倒伏軽減のため、茎長80~100cmで摘芯する。
・本葉12~15枚時（お盆頃）、頂部に花蕾ができた頃が摘芯適期であるが、それ以前に倒伏する危険がある場合は早めに摘芯する。
- 品種特性 【摘芯時期の目安】
紫芽の白：花蕾形成が早い 【7/下旬~8/中旬】
群豊白：わき芽の生育が旺盛 【8/上旬~中旬】
東武鯉玉：秋芽が発生しにくい 【7/下旬~8/中旬】
愛知坊主：風に揺すられると秋芽になる 【8/上旬~中旬】

- 排水対策について
・うどは湿害に弱いので、排水不良の圃場では明渠を掘るなどの対策を図る。
- 病害虫防除について
・アブラムシ類、カミキリムシ、メイガの発生を確認し、多発する場合には薬剤で防除する。
スミチオン乳剤1,000倍 収-150日前まで
（アブラムシ、センノカミキリ、ウドノメイガ）
カルホス粉剤6kg/10a 成虫飛来初期~盛期
（センノカミキリ）
アドマイヤーフロアブル2,000倍 収-60日前まで
（アブラムシ類）

白神みょうが



- ＜葉枯病防除について＞
・最初株の頂部付近から軟らかい展開葉の新葉に白色斑点が生じ、その後、葉脈方向に拡大し大型白色病斑になります。
・比較的乾燥条件で発生しやすく、発生初期からの防除で発病の進展が抑制できます。
・防除薬剤は、ダコニール1,000を1,000倍（薬剤200cc）で水量200ℓ/10a 散布します。

- ＜根茎腐敗病防除について＞
・葉鞘や根茎が侵され、地上部は枯死する。多湿条件では病斑部に薄い白色綿毛状のかびを生じます。
・土壌病害で、7月上旬以降に高温・多雨条件が続くと多発する可能性があります。
・防除薬剤は、ユニフォーム粒剤は収穫30日前のため、8月に収穫するほ場では使用できませんが、9月以降収穫する場合でユニフォーム粒剤を1回使用した場合のみ、散布できます。
・薬剤使用量は、ユニフォーム粒剤を18kg/10a 散布して下さい。ユニフォーム粒剤が使用できない場合には、ランマンフロアブル500倍又はオラクル顆粒水和剤2,000倍を3ℓ/m²（3,000ℓ/10a）使用して下さい。

アスパラガス



露地栽培では、6月末から立茎（茎を1本残して栄養を蓄える）に入るので、伸ばした茎が折れないように管理しましょう。
追肥の時期にもなりますので、S646やジシアンなどを

- 生育に応じて散布してください。
- 「茎枯病」 梅雨時期と9月に発生します。被害残査から発生しますので、前年に発生した畑では注意しましょう。
- 「斑点病」 茎枯病と同じく被害残査から発生します。風通しが悪くなると被害が大きくなるので注意しましょう。

白神きゃべつ



7月中旬には圃場の準備をし、また、連作障害を抑制するために土壌処理剤を散布しましょう。さらに、夏場は干ばつ被害になりやすいので、カルシウム等の資材も投入しましょう。
定植時期は7月下旬から8月上旬です。遅くなると気温が低下するため結球しづらくなります。高単価を狙える9月中旬から10月上旬に出荷できるよう定植は遅れないようにしましょう。

- 定植前には、スタークル顆粒水和剤やプレバソソフロアブル5をトレーに灌注処理し、初期の害虫防除をしましょう。気象条件により異なりますが、2週間~3週間は効果が継続します。
定植後は、干ばつ状態になりやすいためスプリンクラーなどの冠水設備の使用をお勧めします。さらに、干ばつに負けないようにするために、定植後には、速効性の肥料を若干量施用し活着がスムーズに進むようにしましょう。
畝間・株間の除草は徹底しましょう。

幼穂形成期以降の水管理

- 中干しは、幼穂形成期（出穂の25日前）までに終了します。幼穂形成期以降は稲体の活力維持のため、間断かん水（カドミウム含有米の発生が懸念される地域は湛水管理）とします。
- フェーン現象など、乾燥した風が強く吹く場合には湛水管理を行います。
- 気象情報等で、減数分裂期（出穂の12日前）から穂ばらみ期にかけて、低温（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想される場合は、前歴深水処理（幼穂形成期頃から10日間程度、25℃程度の水を10cm位に保つ）で、冷害対策を実施します。
- ★カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、**出穂期前後3週間（7月15日頃~8月25日頃）は湛水管理（水田に常時水を張り、土壌表面を空気に触れさせない）を厳守**してください。

栄養診断による追肥の判断

- 幼穂形成期の極端な葉色低下は、1穂着粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂の発育状況と理想生育量を確認し、生育・栄養診断を必ず実施して下さい。
- 幼穂形成期に葉色が濃く草丈が62cm以上の場合、倒伏の危険性が高くなるので穂肥の施用を控えます。
- 緩効性肥料や育苗箱全量施用の場合はこの栄養診断はあてはまらないので注意してください。

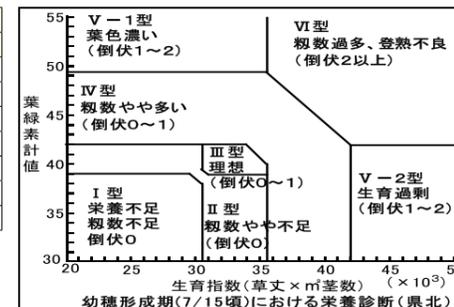
生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

(注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

幼穂形成期（11葉期：7月15日頃）の理想生育量（県北）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD値)	生育量 (×10 ³)
上限値	62	586	11.0	42	35.6
理想値	60	552	10.8	40	33.0
下限値	57	519	10.6	39	30.5

※生育量は草丈×m²当たり茎数。



気象変動に対応した水管理

- 出穂期から開花期は最も水を必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理します。その後は間断かん水とします。
- 気温が30℃以上になる場合、根の機能減退を防止するため、用水が確保できる地区ではかけ流しかん水を行ってください。また、フェーン現象等で乾燥した風が強く吹く場合は、湛水状態を保つことにより稲体の消耗を軽減します。

病害虫の防除対策

- 【いもち病（穂いもち）】
○葉いもちの発生が認められる場合は、出穂15~7日前にコラトップ粒剤5を散布するか、出穂直前と穂揃期に予防剤（ラブサイド剤またはピーム剤）の茎葉散布を行います。
○葉いもちが多発している場合は、上記薬剤散布に加え、必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行います。
注意：ラブサイド剤（フサライド）を含む農薬の総使用回数は「3回以内」です！
- 【斑点米カメムシ類】
ほ場の出穂期*を考慮し、適期防除に努めてください（※出穂期：全茎数の40~50%が出穂した日。少しでも穂が出ていれば出穂とみなします）。
- 1回目薬剤散布：スタークル剤またはアルバリン剤の茎葉散布剤を、**出穂期10日後頃**に畦畔を含めて散布します。
 - 1回目の薬剤散布後7日以内に農道・畦畔の草刈りを行います。その後はカメムシ類を水田内に追いつかないため、収穫2週間前まで草刈りを行いません。
 - 2回目薬剤散布：多発が予想される場合や、水田内に出穂したカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場、休耕田等の雑草地に隣接したほ場では、**出穂期24日後頃**にキラップ剤を畦畔を含めて散布します。
 - 法面や休耕田等の雑草地は、稲の収穫2週間前までは草刈りをしないでください。
 - 近隣に水稻以外の作物（野菜等）がある場合や、養蜂業者がいる場合は、薬剤散布前に情報交換を密にし、散布を実施してください。